

プログラム

1. ジョルジュ・ビゼー Georges Bizet (1838-1875)

歌劇カルメンより “前奏曲”

2. ヨハン・セバスティアン・バッハ Johann Sebastian Bach (1685-1750)

主よ人の望みの喜びよ

3. ヨハン・セバスティアン・バッハ Johann Sebastian Bach

無伴奏チェロ組曲第一番 プレリュード (チェロ独奏)

4. アントニオ・ルーチョ・ヴィヴァルディ Antonio Lucio Vivaldi (1678-1741)

四季より 夏 第三楽章

5. ピエトロ・マスカーニ Pietro Mascagni (1863-1945)

歌劇カヴァレリア・ルスティカーナより “間奏曲”(フルートソロ ピアノ伴奏)

6. ヨハネス・ブラームス Johannes Brahms (1833-1897)

ハンガリー舞曲第五番

7. 参加型コーナー

8. ジャコモ・プッチーニ Giacomo Antonio Domenico Michele Secondo Maria

Puccini (1858-1924)

歌劇トゥーランドットより “誰も寝てはならぬ”(ピアノ独奏)

9. シャルル・カミーユ・サン=サーンス Charles Camille Saint-Saëns (1835-1921)

動物の謝肉祭より 序奏と獅子王の行進曲

10. カンガルー(ピアノ独奏)

11. 水族館

12. 白鳥

13. 終曲/フィナーレ

1.歌劇カルメンより“前奏曲”

始まります！とてもにぎやかなコンサート。最初の曲はビゼー作曲、歌劇カルメンより前奏曲。前奏曲とは歌劇＝オペラの始まりに、お話の幕開けとして最初に演奏される曲です。

ビゼーはわずか9歳でパリの音楽院に入学した早熟のピアニストでした。同じく早熟のピアニスト、サン＝サーンスとは友人だったそうです。ビゼーはその類稀なる演奏技量で富と名声を得ることに興味を示さず、オペラの作曲に力を注ぎました。残念ながら生前はあまり評価されず、36歳という若さで亡くなってしまいます。ビゼーの死後、カルメンは瞬く間に認められ、今では世界で最も上演回数の多いオペラとして有名です。

ヨハン・セバスティアン・バッハ

ヨハン・セバスティアン・バッハは現在のドイツで活躍した音楽家です。主に教会のオルガン奏者として演奏したり、ミサのための曲を作曲したりしましたが、暮らしぶりはあまり豊かではなく、生活のために短い曲を作曲しては売るようなこともしていました。より良い条件の仕事求めては、行く先々で職場とのトラブルを起こしていました。

しかしとても家庭的な面もあり、最初の妻との間に7人の子供を授かり、その妻が亡くなった後に結婚した後妻との間に13人の子供を授かりました。子供たちの多くは夭折してしまっていますが、10人の子供が成長し、4人の息子が高名な音楽家として活躍しました。生活が苦しかったのは子沢山だったことも1つの要因でした。当時はヨハン・セバスティアン・バッハとはその4名の音楽家の父としてしか知られていませんでしたが、息子たちが父から受け継いだ作品を弟子に教え、モーツァルトやベートーヴェンといった作曲家がヨハン・セバスティアン・バッハの作品から学んだため、音楽の父とも呼ばれています。

2.主よ人の望みの喜びを

バッハ38歳のときの作品です。1723年7月2日のミサのために、オーケストラを伴った合唱曲として作曲されました。

17世期にヨハン・ショープが作曲した“Werde munter,mein Gemüte”の4分の4拍子の旋律をバッハが大胆に3拍子にアレンジした旋律と、バッハの書いた一度聞いたら忘れられない3連符の旋律が二つ同時に演奏されます。ミサの中でもミサ全体を支配する意味合いで置かれ、バッハの並々ならぬ自信が伺われます。その後、様々な楽器での編曲がなされバッハを代表する1つになっています。

3.無伴奏チェロ組曲第1番より プレリュード

「音楽の父」ヨハン・セバスチャン・バッハ作曲の「無伴奏チェロ組曲全6曲」。各々6つの曲から構成される組曲が6曲。作られたのはおよそ300年前。この曲を演奏しないチェリストはまずいないでしょう。それどころか、すべてのチェリストが見る究極の夢は、天国で、バッハの目の前でこの曲を弾いて褒めてもらうこと。“チェロの旧約聖書”とまで呼ばれることもしばしば。

1890年、20世紀最大の奏者と言われている13歳のパブロ・カザルスは、バルセロナにある楽器屋で古ぼけた1冊の楽譜を発見しました。ほとんど知られていなかったその楽譜のページをめくると、一瞬にして音楽の魔法が激しく、そして優しく彼を包み込んでいきました。それが、名曲「無伴奏チェロ組曲」の再発見、と言われています。(杉田一芳)

4.「四季」より夏 第三楽章

イタリアの作曲家で、ヴァイオリンの名手でもあったヴィヴァルディが作曲した12曲のヴァイオリン協奏曲で、その中の1番から4番までが「四季」と呼ばれています。四季には全ての曲に作者不明のソネットと呼ばれる詩がつけられていて、音楽は詩の内容を表現したものになります。

夏 第三楽章 ああ、彼が恐れていたとおりになった。
空は稲妻、雷鳴、はては雹や霰まで降らせ、
熟した果物や穀物の穂をみなたたきつぶす。

この彼というのは夏の第一楽章のソネットに出てくる羊飼いのことだと思われます。アドリア海に面したヴェネツィアはしばしば急な雨が降るそうで、その恐ろしさを感じさせます。音楽は 全編を通してとてもスリリングに、無慈悲に荒れ狂う暴風雨を表現しています。怖くて迫力があるけどカッコいい！！

5.歌劇カヴァレリア・ルスティカーナより“間奏曲”

1890年にイタリアの楽譜会社ソソニーニョ社的一幕物オペラコンクールに当選したことで有名になった本作品。マスカーニ27歳の時の出来事ですが、コンクールに出品する以前からこの間奏曲が出来上がっていたことを考えると作曲されたのは更に若い頃かもしれません。祈りを込めた優美なメロディーは世界を虜にしました。耳慣れたクラシックというと、その全てがとても古いもののようには感じますが、マスカーニが没したのが1945年であるように、バッハやヴィヴァルディに比べると近代の作品であると言えるでしょう。マスカーニの指揮による本作品の録音も残されています。

6.ハンガリー舞曲第五番

30代以降の方には“さけるチーズ”のCM曲で通じるでしょうか？！

バッハ、ベートーヴェン、ブラームスの3人をドイツ音楽における“三大B”と呼ぶほどの大作曲家です。4つの交響曲、協奏曲、室内楽曲、ピアノ独奏曲、そして300曲にわたる声楽曲など多岐にわたる作品を残し、その多くが今日も広く演奏され続けています。(ただし、フルートのための曲はなし！嗚呼！！)民族音楽に魅了され、ハンガリーのジプシー音楽に基づき編曲された舞曲集がハンガリー舞曲。スリリングなテンポの変化やエキゾチックな旋律は当時から爆発的な人気を得ました。

7.お楽しみ！参加型コーナー

何が起きるかは当日会場にいらした方のみ、知り得ます。

だって皆さんがどんな雰囲気かでその場で変化させていきますから！

8.歌劇トゥーランドットより“誰も寝てはならぬ”

イタリアのオペラ作曲家プッチーニが書いた最後のオペラです。

オペラの元となった物語は「カラフ王子と中国の王女の物語」。オペラのタイトルになっているトゥーランドットとは、その王女の名前です。

カラフ王子がひと目見て虜になった美しいトゥーランドットは、とっても冷酷な姫君。彼女に求婚する男は、3つのなぞなぞを解かなくてはならず、解けない場合は皆首を切られます。カラフ王子は見事になぞなぞを解いたのですが、姫君はそれでも結婚を拒みます。そこで王子はこう言います。

「夜明けまでに私の名前を当ててみせたら、結婚をあきらめて命を捧げよう。」

この日、北京の街には姫君からのお触れが出されます。

「今夜は誰も寝てはならぬ。求婚者の名を解き明かすことができなかつたら住民は皆死刑とする」

トゥーランドット姫は、家来を総動員して、王子の名前を知る者を探させているのです。

このお触れを聞いた王子が、月明かりに照らされた庭で歌い始めます。

「誰も寝てはならぬ、姫、それはあなたも同じこと」

「夜よ早く消え去れ！星よ色あせろ！」

「夜明けには貴女を勝ち取ってみせる！」

愛の勝利を確信する、ロマンチックでもあり力強い曲調で、テノール歌手の定番ソングになっています。

今回はピアノソロ編曲でお届けします。(野口幸太)

シャルル・カミーユ・サン＝サーンス (以下 サンサーンス)

10歳でモーツァルトとベートーヴェンのピアノ協奏曲を演奏するリサイタルを催し、その神童ぶりはモーツァルトの再来と讃えられ、生涯のほとんどを演奏家・作曲家として生きた音楽家でした。頭脳明晰で音楽以外の分野にも明るく、天文学者、哲学者、考古学者、民俗学者としての顔も持ち合わせていました。

教職についていた際、後に著名なピアニストになる学生が「ピアノを学んでいる」と名乗ったのに対し、「大それたことを言うてはいけないよ」と答えたとあるなど、頭が良すぎる反面、ちょっと辛辣！？なエピソードのある人物ですが、生徒たちの出来が良いと、自宅に招待し夕食をご馳走したり、天気の良い日には自慢の望遠鏡で天体観測をさせてあげるなど、気さくな面もあったそうです。

サンサーンスの作風は、自己の感情を激しく吐露するようなものではなく、冷静に一步引いた視点で写術的に音を使用する描写性に富んでいます。

動物の謝肉祭

フランスのエスプリ香るおしゃれな皮肉。

1886年にプライベートな夜会のために作曲されました。全14曲からなるこの曲は天才サンサーンスのブラックユーモアの結晶。カーニバルの山車に人間ではなく動物達が乗って踊っているという設定なのですが、どうもそのタイトルからしておかしい。本日は14曲の中から一部を抜粋して演奏いたしますが参考までに全ての曲目を記載致します。

1.序奏と獅子王の行進曲 2.雌鳥と雄鶏 3.驢馬(らば) 4.亀5.象 6.カンガルー 7.水族館 8.耳の長い登場人物(驢馬＝ろば) 9.森の奥のカッコウ 10.大きな鳥籠 11.ピアニスト 12.化石 13.白鳥 14.終曲

皮肉的な要素が強かったため、本人の意向で生前は出版を固く禁止していたのですが、サンサーンスの死後に出版されると彼の一番人気の曲となりました。

今日、こども向けコンサートやドラマや映画の中でもよく取り上げられるこの組曲ですが、その際、皮肉の部分はほとんど抜きにして語られます。この曲が人気なのは獅子王の勇壮な調べや、カンガルーの飛び跳ねる動きなど、映像が目に浮かんでくるような魅力的な情景描写に溢れているためです。

9.序奏と獅子王の行進曲

わくわくドキドキするような音楽の幕が開けると、のっしのっしと堂々と歩くライオンの姿が見えてきます。とてもキャッチーなフレーズが印象的です。

10.カンガルー

本来は2台のピアノで演奏されます。ピョンピョンと飛び跳ねる様を効果音的に巧みに利用した短い曲です。この曲を弾いている野口さんの手の動きが、もうカンガルーにしか見えません。さて、こどもたちはどんな情景を想像できるでしょうか。

11.水族館

サン=サーンスの生きていた時代は現在のようなライティングがなされた明るい水族館ではなかったのではないかと思います。独特の浮遊感漂うこの曲は、水族館だけれども、どこか少しドキドキするような、ちょっと怖くて不安になるような、そんな心の動きを感じます。漂う水面。光の反射。水の中の泡。いろんな情景を思い浮かべてみてください。

12.白鳥

散々人の曲、自分の曲を皮肉って演奏し、仲間内で笑い転げて、さあ、そろそろ組曲も終わるころ、というときに突然白鳥が現れます。この曲はおふざけなしの完全オリジナル。あまりの美しい調べにみんなハッとなったことでしょう。初演の夜会のホストがチェリストだったため、ホストに花を持たせる意味合いで終盤におかれたと思われます。「白鳥」だけは生前から出版公開していました。現在ではチェリストの重要なレパートリー。優美でとても情景的な絵画のような音楽です。

13.終曲

ちらほらと今まで出てきた動物達のメロディーが現れてきます。いくぞ！ほら！次はこっちからだ！！なんていう舞台袖で控えている動物たちの声が今にも聞こえてきそうです。技巧的だけれど楽しいメロディーは一度聞いたら覚えてしまうことでしょう。楽しい音楽物語のフィナーレです。

(人首美佳子)

出演者プロフィール

フルート 人首美佳子 (ひとかべ みかこ)

岩手県で生まれ、子供時代を東京、大阪、ドイツ、横浜で過ごす。

大学在学中よりクロスオーバーやクラブジャズを演奏するユニット内で活動。

関東全県でライブを行う。楽曲がローカル局紀行番組テーマ曲として採用される。

現在は発達障害の診断を持つ男の子と、同じく診断を持つ女の子の二児の母。発達障害児育児のため4年間置き去りにしていたフルートを急に再開。現在発達凹凸児を含む4歳から60歳までの生徒に毎回笑いのレッスンを行なっている。

どんな状況下でも自分を高めていくことができる、音楽と共にあることで幸せに生きていけるを自分自身にも掲げ、音楽教育者、フルーティスト、アーティスト、母として活動中。

子ども発達障がい支援アドバイザー

神奈川県立外語短期大学付属高校卒業。武蔵野音楽大学音楽学部器楽学科卒業。

フルートを中野久美子、故中野富雄各氏に師事。

ピアノ 野口幸太

歌が好きで、出かけ先の飲食店で有線がかかるとmyマイクを取り出して熱唱するような幼児だったとのこと。幼稚園の先生がピアノを弾く様子を真似し始めたのがピアノとの出会い。

武蔵野音楽大学、大学院でピアノを専攻し、卒業後は世界的プリマドンナ（オペラ歌手）E. オブラストワ氏の伴奏者として共演させて頂いたり、同志で立ち上げたオペラグループ「labo opera絨毯座」の公演が「サントリー音楽財団（現芸術財団）第8回佐治敬三賞」を受賞した。

音楽教育の分野では、15年間、小学校の特別支援学級に勤務した経験を活かし、自身のピアノ教室でも、重度と診断される発達障害の子供の指導にも積極的に取り組んでおり、遠方からの来室生も多い。

言葉で伝えられない心を表すのが音楽。音楽を通して心の真の部分で触れ合うことで、豊かできげんで幸せな人生を創造することをモットーとする。

チェロ 杉田一芳

ヴァイオリン奏者の両親のもとで、北の大地で生まれる。3歳の頃にヴァイオリンをやってみるも興味をしめさず、6歳の頃に母の知り合いのチェロ奏者の所に遊びに行き、チェロと出会う。

桐朋学園大学音楽学部卒業後、同大学研究科修了。

現在、フリーランス奏者として活動する傍ら、音楽教室等で後進の指導に努める。

休日は息子と遊んだり、チェロの代わりに草刈り機と鎌を持って、畑をやったり、草刈りに追われる。趣味はカメラとドライブ。バス、鉄道、飛行機マニア。ご興味のある方は、私の名前をネット検索してみてください!笑

足利カンマーオーケスター 登録アーティスト

かずさジュニアオーケストラ トレーナー

チェロを川崎昌子、毛利伯郎の各氏に、室内楽を東京クワルテット、毛利伯郎、藤原浜雄、三上桂子、北本秀樹、徳永二男、銅銀久弥、漆原啓子の各氏に師事。

ご来場いただきありがとうございます。

社会の中で音楽の役割とは何でしょうか。

少し気分を良くするもの
歴史のある文化的なもの
クリエイティブなもの

そのどれもが正解だと思いますが、
私たちはコミュニケーションツールとしての音楽に挑戦しています。

言葉にならない感情を 振動を通して 共有し合うツール

共有し合う人に制限はありません

0歳、未就学児、発達障害・知的障害のある方、その保護者の方
そして、一見全く関係性のない大人の方

全ての方と同じ空間で同じ時間を共有して初めてコンサートは完成します。
とてもにぎやかなコンサートをどうぞ思い思いにお楽しみくださいませ。

それでは開演まで今しばらくお待ちください。

2023年7月29日
音楽団体サンアンドラック
代表 人首美佳子

とてもにぎやかなコンサート
企画●人首美佳子 野口幸太
主催●音楽団体サンアンドラック
舞台監督●鈴木英生(カノン工房)
協力●ナヤ・コレクティブ